

黎明館特別講演会

演題 「幕末の鹿児島藩と情報収集」

講師

東京大学教授・同史料編纂所
附属画像史料解析センター長
(前東京大学史料編纂所長)

宮地 正 人氏

一 はじめに

只今御紹介いただきました宮地です。

父がブリヂストンの社員だった関係で久留米で生まれました。小さい頃関東に移り、記憶もあまりないのですが、その関係で九州という土地に何となく親しみを感じてきました。

また、私の勤務しております史料編纂所の基礎を作ったのが、鹿児島出身で、明治前半期では全国随一の漢学者で歴史家でもあった重野安繹先生ですので、意外と鹿児島とは近い感じがしています。というわけで、今日の話も多少ひいき目の処があるかも知れませんが、御容赦を願います。

さて、私の専門は明治維新史です。戦前の維新史は薩長藩閥史観だと批判を受け、戦後は百姓一揆や草莽隊等の民衆史、製茶・製糸という経済史、その延長線上での貿易史が盛んに研究されるようになりました。さらに、石井孝先生という優れた学者によって外交史も本格的に研究されるようになりました。石井先生は岩波新書で『明治維新の舞台裏』と

いう名著もお書きになっています。戦前では当然のことながら、手薄だった諸分野が続々と開拓されていったのです。それらは、明治維新を研究する上で、様々な、面白く、また考えなくてはならない諸問題を付け加えていきます。

しかし、政治過程とか政治史を考えるときには、やればやる程、やはり幕末では薩長土、それから肥前の場合には、政治というより、戊辰戦争で彼らの持っていた全国随一の軍事力が決定的な要素になって、薩長土肥の四藩が明治維新後の政治過程を切り開いたということも、研究すればする程、事実の問題として明らかになっています。

二 集団論と情報

ですから明治維新はいろいろな切り方があると思うのですが、政治過程と権力問題に関していえば、一方では幕府、他方では薩長土肥の動きを考えていかなければならないというのが、私の現在の中間的な結論で

す。ただし、そうはいつでも普通やられているような、特に歴史小説でやられているようなやり方ではないのか、というのが私が今抱いている疑問です。

どうということかと申しますと、薩摩ですと西郷と大久保が出てきます。長州ですと吉田松陰と高杉晋作、それに土佐では坂本龍馬、そして幕府の勝海舟。こういう人々が大体皆さんご存知の通り明治維新の政治過程の前面に出てくる人々です。しかしながら、彼らは政治家であつて思想家ではありません。政治家の基本というのは、与えられた集団なり組織を政治的に強化し動かすこと、そういう使命を持っています。逆に言えば、集団とか組織に支えられ、そのような組織なり集団が強ければ強い程、彼らのトップに立つ人達の力量も発揮されるという関係が、私は政治家のあり方だと思つています。そういう意味では、トップレベルの人物論だけでは、真の意味で彼らを評価することにはならない、というのが私の考え方です。

歴史の分野でも、思想史の分野ではこうはいきません。思想史の分野で優れた人を評価する場合には、彼の思想が他の九十九人よりいかに優れ、卓越していたか、というところに論証の力点がおかれます。しかし、政治史の分野では一人一人を高く評価するということは、その人の政治思想なり、政治的な方針と行動が、残りの九十九人の人を死なせ否定するのではなく、彼等を生きたきさせ、活動させるところに意味があるわけです。逆の面から見れば、そういう人達のまわりにいた九十九人の人達の能動性なり活動性そのものが、そのリーダーの能力と力量をさらに発揮させるという関係があります。これは昔も今も今後同じだろうと思ひます。

私は、一人の人生を死なすのに九十九人の人を死なすのは政治史の研究の方法と叙述の方法ではない、一人の人間を生かすことによって、まわりの九十九人を生かせることが政治史の方法であり叙述であると、周りの人には常々言つて居るのです。このことを別の言葉でいえば、集団論、あるいは組織論という角度から政治過程と政治史を考えなければならぬということだと私は思つて居ます。ではおまえはどうやるのだというご意見がすぐ出てくるかも知れません。

今私が考へているのは、この鹿兒島藩を集団論なり政治論で分析するには、政治情報の角度から切ると、新しい視角が出てくるのではないかということなんです。先程館長さんのお話にもありましたように、鹿兒島県では『忠義公史料』とか、現在では『玉里島津家史料』というような日本の歴史史料の中でも一級の史料を次々に出しています。そのような史料からこの問題を考へる材料が出て居るので、それらに基づいて私の考へを、以下、述べさせていただきます、というのが前置きです。

三 幕末期の鹿兒島藩

本論に入ります。

今日の日本は言うまでもなく中央集権的体制が非常に強いです。人材も中央に吸い取られ、なかなか国元に帰つてきません。そういう中央集権的な体制が都道府県レベルでは人口の問題とか、それから県民所得、あるいは工業生産高ということで、都道府県が相互に比べられます。そういう比べられ方をされますと、鹿兒島県は都道府県のトップになかなか

かなりにくいということは事実だと思えます。ただし、こういう比べられ方をされるといのは、これは明治以降の近代日本のあり方がそうさせているわけで、そのようなイメージで明治初年までの鹿兒島藩なり日本史を考えると、ものが全く分からなくなる、というのが私が最初に申し上げたいことです。

では明治初年まではどういう形で鹿兒島、あるいは鹿兒島藩が考えられていたかということですが、言うまでもなく江戸時代のトップは將軍、幕府です。庶民から言えば「公儀」とかあるいは「天下様」という呼び方でよばれていました。その下に、全国二百数十余藩が置かれていたのです。ただし、これには非常に厳しい序列がありまして、勝手にバラバラに諸藩が並べられていたわけではありません。

諸藩のトップは言うまでもなく加賀百万石の前田家で、その次にくる大名はどこかといえますと鹿兒島の島津家、第三位が仙台の伊達家、第四位が熊本細川家、第五位がこれも九州の福岡黒田家です。大名の序列から言いますとトップレベルのうち、三家までが九州の大大名であるということですが。これは九州の人間だけが知っているだけではなく、全国の日本人、当時三千万の日本人がほぼ常識として頭においていたことなのです。

戊辰戦争の時に会津藩は最後まで戦います。これは京都守護職を勤め、孝明天皇の信頼が厚かった会津藩としては当然ですが、その盟主になったのは仙台の伊達です。なぜ盟主になったのかといいますと、薩摩には負けられない、薩摩の風下にはつきたくないというのが、非常に大きな要素だったと私は思っています。

これは加賀の前田家と同じです。慶応三（一八六七）年の十二月に、

加賀では、大軍を結集して京都の状況をひっくり返そうとする動きがぎりぎりのところまで進められました。そして、戊辰戦争では結局新政府側に参加しますが、それも最後のぎりぎりになって、いやいや参加したのです。薩摩の風下にはつきたくないという思いが、私の考えでは、明治十一年、紀尾井坂の変において大久保利通を暗殺した人達が加賀藩の出身だということまで、十分つながってくると思います。こういう雰囲気や念頭に置かなければ、幕末から西南戦争までは分からないと私は思っています。

しかし、この鹿兒島藩の場合には、この黎明館で最近展示がありましたように、十三代將軍の家定の後妻には天璋院が入ったように、前田家・伊達家以上に幕府との結び付きが強い大藩です。

では、このような全国第二の大藩の鹿兒島藩が、幕府や他の諸藩以上に情報問題に敏感にならざるを得なかったのはなぜかというのが、非常に面白い問題です。ある人に言わせると、鹿兒島藩は「封建制の極北」という言い方をします。しかし、「封建制の極北」だとなぜ明治維新が出来たのか、私はあまり上手な説明にはなっていないと思います。問題のたてかたがうまくない。なぜ、幕府や他の諸藩以上に、これ程情報問題においてセンチティブな藩だったのでしょうか。結論を先に言えば、私は琉球問題だと思っています。

四 鹿兒島藩にとっての琉球の位置

普通、近世後期を論ずる最初は、蝦夷地問題、北方からのロシアの脅

威で始める。これで寛政の改革、松平定信の人物論が行われるのです。しかしながら、北方の脅威と同じ性格の南方の脅威、南からの圧力については歴史学でも十分な力点が置かれておりません。

日本地図を頭に置いていただきたいのですが、琉球というのは沖縄本島だけではありません。先島まで入れると台湾の間近まで琉球列島が延々と続いています。しかもこれが総て薩摩の付属になっています。十八世紀前半から十九世紀前半の南方問題は考慮に入れていい問題だと思っています。

他方で近代日本を論じ始めるときには、一八五三（嘉永六）年六月のペリー浦賀来航から始めます。しかし、こういう形で日本近代の最初を考えていいのかという問題と琉球問題は結び付いていると私は思うのです。琉球問題はペリー来航の前、十年前から鹿兒島藩と幕府にとって非常に大きい問題として捉えられていたのです。

一八四四（弘化元）年にフランス艦隊はフォルカードという宣教師を那覇に残します。このフランス人、しかも宣教師であるフランス人をどうするかというのが非常に大きな問題になりました。しかも三年後の一八四六年には、フランス東洋艦隊の司令長官セシュが艦隊を率いて琉球に開国を求め、そして那覇に残していたフォルカードを連れ長崎に来ます。この一八四六年はフランス人だけではありません。ベッテルハイムという人間がイギリス艦隊によって那覇に置かれ、そこで宣教活動を始めるわけです。まかり間違えば、これは外交問題と日本の開国問題そのものになります。どう対処したらいいのか。

ペリーが来航する十年前から、鹿兒島藩と幕府の一部、特に老中阿部正弘は苦慮します。これに対処するためには、第一に外交、第二に海軍

をどうするか、この問題にぶつかります。全国より十年前にペリー来航的情况に鹿兒島藩は置かれたのです。この後、ご存知の通り、一八五三年には浦賀に来る前に那覇にペリー艦隊が来ます。そして一年後には日米親条約を結んだ直後に那覇に来て、米琉条約を琉球王国に強制します。アメリカ艦隊が来ただけではありません。フランス艦隊もその後に来ます。そして幕末で有名なジラルとかカションとかいうフランス人宣教師は那覇で日本語を学び、それから横浜なり函館に来るわけです。一貫して鹿兒島藩がその問題を抱え込まざるを得ない情況に置かれていました。

ただし、琉球を鹿兒島藩が押さえているという問題は、あと一つの側面があります。中国問題です。中国問題に、一八三九年のアヘン戦争以降日本人が非常に関心を持ち、中国の例が、いつ日本の例になるか、日本人が戦々恐々としていました。

では中国問題はアジアではどこから情報が入ったか。これは三つあります。一つは北京経由です。北京経由の場合には、ソウル、釜山を通じ、釜山を押さえていた対馬の宗家から長崎に、そして長崎奉行の仲介を経たすぐ江戸に北京情報が伝わります。第二のルートは、華中、揚子江地域の情報です。揚子江地域の情報は、浙江省乍浦の商人が毎年長崎に貿易船で来ます。従って、華中情報は長崎奉行所が最初に掌握します。第三のルートが琉球ルートです。琉球の場合には、これも皆さんご存知の通り、毎年琉球の船は福建省福州の琉球館に行きます。そして北京に行くこともありますし、あるいは琉球館で物を買入れ入れることもあります。ここから始終中国の情報、特に華南情報が首里に入ってきます。首里に入ってくるその情報は在番奉行を通じて鹿兒島に伝わり、そして国内に

入ってきます。この三つのルートが中国情報の入る定期的なルートです。今言ったことをまとめますと、一つは中国を中心とする東アジア全般の諸情報、第二は琉球に対する西欧列強の動向が鹿児島藩を通じて日本の中へ入るといふ、日本の国家の最先端部分に鹿児島藩が位置づけられていたということです。

これはもしかすると島津斉彬とか、藩庁のトップレベルだけの極秘情報ではないか、とお思になるかも知れませんが、そうではないのですね。時間の関係で一例だけ申しますと、一八五三年ペリーが来たときは、中国でも大変な年でした。それは太平天国の乱という、中国の巨大な農民反乱が最も力を強めた時期で、南京が太平天国の乱によって陥落した年なのです。そしてこの情報が福州の琉球館から、琉球の関係者に手紙で送られるのが同年の四月です。そして鹿児島では、少なくとも鹿児島藩士レベルではほとんどこの情報が伝わりません。そして、太平天国の乱という未曾有の大乱がなぜ起こったか、という風説書が一緒につけられて鹿児島藩に来るのです。

鹿児島藩の人は当時全国に散らばって勉強していました。その一つが大阪にあった緒方洪庵塾です。鹿児島藩士の子弟が緒方洪庵塾に入門しているのです。史料によりますと、

琉球人唐土より故郷に遣し候書翰写並風説書共薩州書生宿元より緒方塾に到来、

とあります。大体八月頃にこの情報が鹿児島から大阪に來ました。緒方塾では全国のいろいろな人々が最新式の蘭方医学を学んでいるのです。そして緒方塾の中で薩摩の人の二通の手紙を見た人がすぐ国元に写しとって送っています。これが十月二十八日付で、私が見た史料では紀州か

ら大阪に勉強をしに來た沢井俊造という人が、今で言えば御坊町（和歌山県御坊市）、当時では塩屋浦といわれる所の、在村の、人名辞典には全然載っていない羽山大学という医者にこの情報を伝えているのです。

こういう形で、中国情報というものが、琉球・薩摩を媒介にして全国の日本人に知れ渡ります。こういう位置に薩摩があったのです。これは、薩摩の人間が他の藩より勉強したとか勉強しないというレベルの話ではありません。鹿児島藩が置かれていた、南へ開かれた大藩であるという客観的な地位自身が、ペリー來航から十年前にこういう情況に鹿児島藩全体をおき、それに対して、外交と海軍をどうするのかということとして考えざるを得なかった、というように理解していただきたいのです。

五 蝦夷地問題と肝付兼武

このように最も外交的・軍事的に敏感な所に置かれていたこと、特に薩摩の場合は南方に向かって置かれていたということは、日本で同じく外交的・軍事的に危険だと思われていた蝦夷地問題にも視野をひろげさせることになります。鹿児島県関係の辞典にも人名としては載っていないのですが、肝付兼武という人がいます。生まれは一八二三年です。彼の御長男は肝付兼行といって、海軍中将まで昇り、最後は大阪市長を短い間おやりになった方です。このように息子さんは有名な方ですけども、そのお父さんの兼武は肝付家の次男でした。兄はこの鹿児島で下級士族として戊辰以降までずっとお勤めになつて居るのですが、兼武は次

男という気楽さもあつて、天保年間に形のうえでは脱藩して全国を遊歴します。

彼が一番関心のあつたのはやはり蝦夷地問題をどうするかということ。十分材料があるわけではないのですが、今まで解っている限りで申しますと、嘉永元（一八四八）年、ペリー来航より六年前に江戸でいろいろな先生の所で勉強している。坂下門外の変に関係した大橋訥庵の塾に入っていますし、大橋訥庵の弟で、これまた江戸で塾を開いていた清水存軒、あるいは儒者としても文人としても有名な藤森天山（弘庵）の塾にも入って勉強している人です。

そして彼は鹿児島県の人よりも長州の人に有名なのです。なぜかといえますと、この肝付という人は吉田松陰の親友でした。江戸の梁山泊と言われていた鳥山新三郎塾には、いろいろな人々が集まっています。吉田松陰も集まり、熊本藩の宮部鼎蔵も集まり、そしてこの肝付兼武も集まりました。そういう所で顔がつながり、天下の情勢、特に蝦夷地問題を議論しました。なぜ肝付が蝦夷地問題の中心人物になったのかといえますと、嘉永三（一八五〇）年に、ですから吉田松陰に会う前に、自分が蝦夷地まで行って見聞記を書いています。それに「東北風談」というタイトルの付けています。この「東北風談」というのは、ペリーが来航した後、全国の人間が海外の情報、国内の情報を集めるために風説留というのを作りますが、その風説留の多くに、この見聞記が書き留められています。

私が見るところでは、安政年間で、全国で一番有名な鹿児島藩の人は誰かといえますと、西郷でも大久保でもなく、この肝付兼武だったのではないでしょうか。実際にこの人は蝦夷地問題に一生を捧げるわけでは

が、安政三（一八五六）年にはもう蝦夷地に行つて、そこを調査しに来た北海道の名付け親である松浦武四郎と会っています。その後は函館奉行所の雇いになって函館奉行所の下で働きます。

最初どこで働くのか、これも非常に面白いことなのですが、一八五九（安政六）年に函館でも貿易が開始されます。横浜・長崎・函館で貿易が開始されたのです。貿易に一番必要なものは何かといえますと、石炭もありましたけれども、外国人が来た時の食料問題、特に肉の問題なのです。日本では肉が供給出来ません。そこで、肝付は函館奉行所の命令を受けて肉の買いつけに東北まで駆け回り回つたのです。それから函館で牛の牧場を開きます。これも察するに、外国人用の食肉生産のためだと思われまふ。そして、片方では函館で塾を開くのです。次男ですので生活はかなり苦しかったと思つていたのですけれども、自力でかなりの資産と家作を函館で作らあげたようです。そういう非常に面白い人なのです。

ところで、先程お話ししましたカシヨンというフランス人宣教師は、琉球から函館に来て活動するのですが、このカシヨンとも親しくしています。肝付という人は立派な漢学者ですから、カシヨンの日本語を直しています。カシヨンの言葉で言えば、「泉のごとき真の知識を持つている人物」と書かれているのが、この肝付という人物なのです。では、私の話からしますと、鹿児島藩の中でも風変わりな人がいて、一人だけ北海道に行つただけなのではないかと思ひになるかも知れませんが、この人は非常に親しい・家思いですから、毎年この鹿児島のお母さんとお兄さんには連絡をとつていたようです。どこに行つてゐるかは、ちゃんと国元で分かっています。しかも、元治元（一八六四）年には、不運

なことに彼の家が函館奉行所によつて上知されてしまうので江戸に出て来ます。そしてこれからは江戸の鹿兒島藩邸と非常に深い関わりを持つことになります。慶応二（一八六六）年には、西郷隆盛の手紙を持つて松浦武四郎の所に相談にも行つています。何を相談したか残念ながら分かりません。そして慶応三（一八六七）年、幕府が潰れるその前の年には、小栗忠順という幕府の勘定奉行の所に五回にわたつて何かを相談しに行つたり、あるいは意見を上げに伺つたりしています。慶応四（一八六八）年初頭になりますと、京都にいる大久保利通と会つて相談してきます。非常に幅の広い動きをして、やはり蝦夷地問題を議論しています。

そして幕府が潰れ、函館奉行所も撤収する直前になりますと、飄然としてまた函館奉行所に顔を出すのです。彼の所には、奥羽鎮撫総督使節の手紙が来ています。少し七面倒くさい文章ですけど、読んでみますと、函館領の事、右は旧来幕府領の所、此節奥羽鎮撫使御下向相成居、人民聊動播致さず候様、各々より取り鎮めらるべく（各々というの）は肝付とあと一つの宛先秋田藩のことです。且幕府軍艦も碇泊の由相聞へ候間、これまた発乱致さざる様取計いこれ有たし、云々というように、肝付を名指しで鎮撫総督から手紙がきているということ、やはり鹿兒島の代表として函館で行動していたと考えざるを得ないので。

で、明治二（一八六九）年から蝦夷地から北海道に名前が変わりますが、その役人になって数年間働きます。赴く前に明治元年から明治二年にかけて、この鹿兒島に戻っているいろいろな整理をしています。そのとき会つた中の一人が西南戦争で隆盛と一緒に死んだ桂四郎という人なのです。鹿兒島藩のトップにいた方です。肝付は彼に意見を具申したので

す。どういふ意見かと言いますと、

蝦夷地へ出稼ぎ人数御差出の事は、実々以て御為筋には相違これ無、いわば、鹿兒島藩は貧乏な侍が多いので、蝦夷地に出稼ぎの形で人をやれと。

蝦夷地出稼ぎがてらに御警衛御持ち被遊候事は、是非とも急速御取掛御座候様、

というのが、彼の桂に宛てた意見なのです。いわば北海道防備を北海道の開拓と兼ね併せてやつてくれ、ということを経に言い残して彼は北海道に移つたのです。

以上のお話しをしますと、これは肝付という非常に風変わりな人が、ひよんなことで蝦夷地（北海道）に行つて、自分個人の働きで蝦夷地問題を鹿兒島藩に持ち込んだのではないかとお思ひになるかも知れませんが、そうではないのです。西郷隆盛が二度目の島流しから呼び戻されて京都に上がるのが元治元（一八六四）年の三月です。西郷が大久保と相談しながら当時一番やりたかつたことは、幕府と会津の路線からいかに鹿兒島藩を切り離すかということです。これは禁門の変の直前ですから。そのとき彼が考えていた一つの政策というのは、蝦夷地問題を京都で持ち出すことでした。そして、西郷と江戸の鹿兒島藩邸の間で、先程言つた松浦武四郎を京都に呼ぶという相談がかなりの処まで詰められます。ただし、最後のところで、松浦が今の情況だと幕府に対して鹿兒島藩は嫌疑を受けているので動いても仕方がない、ということを取り止めにあります。西郷隆盛自身がこの蝦夷地問題を、もう京都に上つたそのときから一つ押さえているわけで、その延長線上で慶応二（一八六六）年に西郷隆盛の手紙を持つて肝付が松浦の所へ行く、という動きになる

わけです。

そして、この元治元年の時には鹿兒島本藩の方でも松浦武四郎から千島の地図を借りて写し取っています。しかし、写し取るのになかなか手間暇がかかったと見えて、江戸の鹿兒島藩邸の人間が早く返さないと松浦に申しわけないから返してくれと言おうような督促の手紙を国元に出しています。そういうことを考えますと、肝付という人はやはり鹿兒島藩と余程深いところで結びつきながら蝦夷地問題の情報を、国元・江戸・京都にもたらした人物だったのではないかと私は思っています。

今、申しましたことを要約しますと、一番対外的なことにセンチティブにならざるを得ない地位、場所というのはあるのですね。鹿兒島の場合なら南方問題、長州の場合には朝鮮問題、そして佐賀藩の場合には長崎問題。これは文化五（一八〇八）年、フェートン号事件で藩主が幕府から厳罰を受けて以来、長崎問題に対して失策があると申しわけないというところから佐賀藩の軍事改革が始まるわけです。そのような非常に神経を尖らさざるを得ない場所、その中の一つ、一番大事なところに鹿兒島藩がいたのです。その延長線上で、北方問題もかなり鹿兒島藩全体の問題になっている、というように私は思っています。

六 江戸の情報収集と南部弥八郎

このような情報問題で、私は今、琉球と蝦夷地の問題を申し上げたのですが、情報の集め方、内容について一番詳しく分かるのは江戸藩邸の動きですので、少し材料を元にしながらお話してみたいと思います。

いわばトップレベルですと国元と京都という話になりますが、そうではなく、トップレベルが動くにはいろいろな処の情報が必要で、しかも情報源の一番大事なところは幕府の動きを知ることの出来る江戸だということになります。では、伝統的な幕府の構造に対し、鹿兒島藩の江戸藩邸が、特に江戸藩邸で情報収集の中心になっていた南部弥八郎という人物がどういう形で入っていたのか、ということなのです。

伝統的な枠組みで大事なものは、常識的なことですから、江戸城の情報です。諸大名、あるいは天領からの情報は総て江戸城に集約されます。しかも、形式的には新聞が一切ないわけですから、江戸城の情報は幕府の中枢部分の人しか分からない。ただしこれは建前で、密かに漏らす人がいるのです。そういう役割を持っている人、それが江戸城の御坊主衆と呼ばれる人々です。薩摩にも、坊主衆を何人か高い金を毎年贈りながら使っていました。これを「御出入」と言います。

それから情報を提供してくれる可能性がある人としては幕府の右筆がいます。奥右筆と表右筆と二つのランクがありますが、そういう人達につながりをつければ内密の情報と、いろいろな問題をどう処理したらよいかという幕府の先例を教えてください。これは「内用頼入」というもので、「御出入」ではありません。そのような資格を持っている人、いわば鹿兒島藩が下手に出る情報をもらう人、例えば、生麦事件の時に、島津久光が困ったのは、どういう処理を公的にすればよいか、その知恵をつけてくれたのはこの右筆です。誰か薩摩の人間が斬ったけれども脱藩してしまっただけからなら、こういう書面をまず届ける。それでその通り届けて久光は京都に上るわけです。こういう人達があらゆることに関して、鹿兒島藩に対して情報を提供してくれうる人です。

ただし、幕閣内部の議論はこういう人達は分かりません。従って幕閣内部に手づるを持たなければなりません。幕閣というのは老中と若年寄を指します。南部弥八郎が始終出入りしていた幕閣は誰かと言いますと、嘉永六（一八五三）年、ペリーが来たその年から慶応元（一八六五）年までの長い間若年寄をやっていた酒井忠毗という人なのです。この人の公用人、公務の仕事を取り扱うセクレタリーに非常にコネがあつたのです。ですから幕閣の動向がどうか、あるいは一八六〇年代になりますと、外交問題をしよっちゅう老中・若年寄の間で処理しなければならぬ、議論しなければならぬわけで、鹿兒島藩は幕閣の間でどのように外交問題が議論されているのか、この情報を、残されている史料の限りでは、ほとんど酒井忠毗の公用人からもらっています。

幕府の動きがどう出るかの一番最初の試金石は江戸の町触なのです。江戸の町をどう警備させるか、どう江戸町民に伝えるか。従って幕府の動きを探ると同時に、江戸の情報を握るためには江戸の町名主を押さえなければならぬ。そして鹿兒島藩の上屋敷があつたそばに、高輪の町名主田中権右衛門という人がいます。この人からしよっちゅう情報を得ています。また江戸町奉行所は、町年寄を抱えているいろいろな改革なり御用金取り立てなりをやりますから、そういう事に關してはその係の町名主に、どういう形でルートをつけたのか分かりませんが、微細なことまでよく調べています。それだけ気のまわる人が、江戸藩邸の留守居役がいなければ情報は集まらないということです。

江戸の町であと一つ大事なのは、捕り方の問題です。江戸町奉行、同心、ただし同心というと幕府の役人ですから、その下の同心手先、すなわち銭形平次のような岡引きと呼ばれる連中にも結び付きを持っていま

す。どういう情報なのか、一例だけ挙げますと、元治元（一八六四）年に鎌倉でイギリス士官ポールドウィンという人が浪士に暗殺されます。そしてその犯人だということ、その年の末に清水清次という人物が首を斬られるのです。ただしあれは真犯人ではない、という話をこの岡引きから南部弥八郎は情報を仕入れて国元に手紙を出しています。

今、江戸町についてお話ししましたが、あと大事なのは幕府領全国八百万石、半分は旗本領ですけれど四百万石は天領ですから、天領の動きを知らなければならぬ。各代官所は江戸に役所を持っています。江戸の役所と代官所は勘定奉行所の直轄ですからそう簡単にコネはつけられない。ですからそれぞれの代官所の出入りの人間をつかまえてその人間から情報を得るわけです。では、代官所においてどういう情報が南部弥八郎にとって必要だったのか。

一例だけ申しますと、慶応元（一八六五）年一月の情報が必要だったのです。西郷隆盛が尾張のお殿様を総督に立て、広島で第一次長州征伐を丸く収めます。この時には、長州の三家老の首を出せばこれ以上は深入りしない、和解するという斡旋を隆盛がして丸く収めるわけです。この収めたことに幕府内で最も腹を立てたのが一橋慶喜であることは皆さんご存知の方も多いと思います。長州藩で腹を立てたのは、高杉晋作を筆頭とする諸隊の連中で、元治元（一八六四）年の末から高杉晋作は文字通りの内乱を計画します。そして一月に、内乱軍、すなわち諸隊の軍隊が藩兵を打ち破るのです。いわば一種の「革命」情況を生み出したのです。

長州の情況がどうかというのは幕府も必要、薩摩も必要です。ただし普通の人が入ったら殺されてしまいます。その情況が必要だったのは、

幕府の代官所でも一番長州に近い石見国の大森銀山を握っている代官所でした。従って代官所は鉾山師の手下を派遣して長州内部に入れ、潜入した人物は非常に細かい情報を入手して、大森代官所に提出するのが一月二十四日。飛脚を仕立てて江戸の出張所に届くのが二月十五日。そして翌日の十六日に江戸城に報告しています。この報告書を、南部弥八郎は大森代官所に出入りの人間を通じて二月十九日に手にしているのです。

人とのつながりをつけるということは、金を贈ったら出来るような簡単な問題ではないのです。その人との信頼関係、いろいろな関係をあらゆる処で大事にそだてない限り、こういう情報は一つも入らないのです。それをやっているのが江戸の鹿兒島藩邸なのですね。彼の報告書のある部分は今活字になっている「玉里島津家史料」にも入っていますので、機会があったらぜひ御覧いただきたいと思います。

七 新しい情報センター

以上申しましたのは、いわば幕府の伝統的なシステムに薩摩の江戸藩邸の人達がどう入り込むか、ということですが、幕府も幕府なりに幕末は大変な努力をしました。新しい事態に何とか対応するように必死でした。そして、幕府のもとにはその当時全国でも一番優秀な人材が集まってきました。どこに集まってきましたか。一つは開成所という所です。これは学校と思われるのは困ります。ヨーロッパの自然科学・社会科学の知識を集約する情報センターが幕府の開成所だと思っていただけ

ばいいのです。従って開成所には一番レベルの高い蘭学者が集まるのです。ここに食い込まない手はないのです。

開成所で行う一つの仕事は新聞の翻訳、英字新聞の翻訳です。そして会社社という組織を作り、メンバーが翻訳し、第一義的には老中・若年寄に最新情報を提出するのです。ただし、作成したものは、その会に入れば回覧の形でメンバーには見られるシステム、ある意味では非常にオープンなシステムを彼らは作りました。そこに南部弥八郎が入会を申し込むのが慶応元（一八六五）年四月三日と、ちゃんと記録に残っています。こういう形で開成所に入り込みますと、そこでのトップレベルの人達にいろいろな形で関係をつけられるわけです。ただし、情報をくささいと入ってもくれるわけがない。相手と同じレベルの議論をし、こちらからも情報を提供しなければ無理なのです。私は、それが出来たのが南部という人の偉いところだと思います。ただし、この南部という人物は「明治維新人名辞典」にも何にも載っていない薩摩の人です。

一例だけ蘭学者との関係で申し上げますと、手塚律蔵という有名な蘭学者、これは長州出身ですけれども、考え方が長州の攘夷派と違いますが、狙われて、身の危険を感じて結局下総の佐倉藩の御雇いになります。ただし、長州藩にはしょっちゅう出入りをしている貴重な人物なのです。南部弥八郎がどういう情報を手塚からもらったかといえますと、例えば、文久二（一八六二）年五月、島津久光が拳兵して上京した四月の翌月のことなのですが、幕府にとっては島津久光が兵を挙げて京都に来たという事態を知って、これにどう対応するかということが非常に重要な問題となりましたが、その責任を当時の老中首座の久世広周が担わざるを得なかった。しかし久世は京都には行きたがらない。誰を使

うかというところ、長州藩の人間、特に従来京都入説をしていた長井雅楽を使いたい、ということと長州藩邸に久世の関係者が出入りして相談しています。そして、その話を手塚律蔵が全部聞き、この手塚との会話の中から、南部は長州の動きにつき、ほぼ正確な情報を握って国元に報告しています。

第二番目に幕府が作った新しいシステムは何かというと、これは軍事組織の陸軍奉行と陸軍所という所なのですね。ここで組織するのは歩兵隊と呼ばれます。百姓・町人の御雇い兵です。しかし実戦では武士の兵力より強くて、第二次長州征伐でも、長州軍と互角に戦えたのがこの歩兵隊なのです。最新式の連発銃を持っている強力な部隊、それを管轄しているのがこの陸軍所という所です。

ではこの歩兵隊が最初に出動したのはどこかといいますと、第二次長州征伐ではありません。元治元（一八六四）年、関東では甲子の争乱といわれる水戸天狗党への討伐戦争です。この討伐では、江戸の旗本と共に、養成したばかりのこの歩兵隊が大挙して筑波・水戸・那珂湊に行つて激戦を繰りひろげるのです。その情報は逐一、その管轄司令部である江戸の陸軍所へ報告される。勝ったか、負けたか、損害はどの位か。ただし、この陸軍所で南部弥八郎の仲介をした人は史料からは分かりません。もう少し探したら分かるかもしれません。幕府機構の新しい機構に對してこういう形で入っている。

八 諸藩との関係

江戸の留守居というのはあと一つ、留守居同士の情報交換、これは幕末だけではなく、江戸時代の最初からあります。それも頻繁にやっています。一番いい情報が入る江戸の藩邸はどこかといいますと、これは会津藩です。「薩賊会奸」と長州から言われたように、ある時期は、鹿兒島藩は会津藩と蜜月時代を持っていましたから、そういう意味でも会津が京都から江戸に流す情報は、かなり精度の高いレベルで鹿兒島藩は聞いたのです。そして当時の会津藩の江戸家老に井深宅右衛門という人がいます。これは日本キリスト教史で非常に有名な横浜バンドの中心人物である井深梶之助と呼ばれる長老の牧師さんがいますが、その人のお父さんで江戸家老で五百石の大身です。この人から南部弥八郎は情報をもらっています。

あと一つは、情報収集では鹿兒島藩以上の能力を持っていた細川藩です。細川との間でも、仲はそう良くはありませんけれど、これは正にギブアンドテイクの関係で、かなり薩摩からも情報を提供したと思います。細川藩からは精度のいい情報が入ってくるのです。

もう一つは、幕末の情報問題ですと、皆さん関心があったらやってみられるといいと思うのですが、それは仙台藩です。仙台藩も藩自身は動きが鈍いですが、情報収集から言いますと非常に優秀な藩でした。同藩の人間で南部と情報面で接触を持つものに多田平次郎という人物がいます。この人は、人名辞典にも出ていない人なので、私も調べてみようと思うのですが、こういう人達から情報を仕入れているのです。

九 接点を持つ人物をつかむこと

細かく説明すると面白い話ばかりですけれど、時間がかぎられていましてこの位にして、次に、南部弥八郎がこのような情報を集めるに当たった特徴について二点お話ししたいと思います。

第一に、当然のこととして、藩自身がこのような情報を集める人間を何人持っているか、ということですが、例えば、先に紹介した甲子の争乱で、関東全体が騒然とした状況になります。この時、各藩がどう動くか、これも情報収集の大事な目標です。そうすると、各藩に回り、あるいは各地に出張り、情報を集めるような人々が鹿兒島藩にはいるわけですね。南部自身はもつと地位が上ですから、実際には関東諸藩には出張りませんが、そういう人物を江戸藩邸は複数かかえています。

第二に、彼が一番関心をもっているのは、やはり横浜関係の情報です。これになると彼自身の人的資本がものをいいます。接点を持っている人間をどうつかむか、これは昔も今も情報収集の要です。彼がつかんでいるのは、今から考えますと、なる程と思う人がいます。一人はアメリカ彦蔵（ジヨセフ・ヒコ＝浜田彦蔵）と呼ばれるアメリカ帰りの、最初にアメリカに帰化した人ですね。当時、神奈川のアメリカ領事館の通訳をやっている人です。

なぜこの人が大事なのかといいますと、文久三（一八六三）年五月十日に長州藩が下関海峡でドンパチと大砲を撃ち始める。これに対してアメリカの海軍が怒ってワイオミングという軍艦を下関に派遣して砲撃戦を起こすのです。このワイオミングにアメリカ彦蔵が乗ってくるわけ

です。ですから帰ってきたらすぐその直後に、長州下関での戦争状況を南部が聞き糺しているのです。

ところで、言うまでもないことですがけれども、横浜情報で一番関心があつたのは、いつ横浜のイギリス艦隊が鹿兒島に来るかという情報でした。これについては、もう生麦事件直後からアンテナを張り、非常に綿密な調査をやっています。横浜にクリーニンング屋さんをやっていた半次郎さんという人がいたようです。クリーニンングは当時の日本人は頼みませんが、軍艦で来た人とか居留地の外国人はクリーニンング屋さんに頼むわけですね。その職業をやっていた半次郎という人を使って、いわば仕事でたらにイギリスの船に全部乗ってもらったのです。半次郎に横浜に來ている軍艦に乗ってもらったのが文久三年の二月のことです。そしてイギリス艦隊が鹿兒島に來るのが六月の末ですから、それよりかなり前のことですね。一艦ごとの大きさ、乗り組んでいる兵力、外輪船かスクリーナーか、スクリーナー船とは当時言いませんでしたから、ぐるぐる回るねじ式の軍艦か、そうではないか、それから一番大事なことは、どの位大きい大砲を何門積んでいるのかということを書き上げさせて、これも国元に報告しています。南部が乗れるわけがなく、ただし、外国船出入りのクリーニンング屋さんなら乗れるわけです。

アメリカ彦蔵がワイオミングに乗ったとすれば、薩英戦争でイギリス軍艦に乗った日本人がいるのはご存知の方もいらっしゃると思います。清水卯三郎という人ですね。史料で見ると、南部は薩英戦争の前には清水卯三郎のことは知らなかったようで、その後からは、もうしよつちゆう名前が出てきます。戦後はすぐ彼をつかまえて外国の動きを聞き糺したり、あるいは外国の文章を清水卯三郎に翻訳させたりしていること

が分かります。

どういふ情報を聞き糺しているか一例だけ挙げますと、慶応元（一八六五）年、第二次長州征伐で数十万もの幕軍と諸藩の軍隊が大坂に集結しているそのときに、外国軍隊が連合を組みまして大坂湾に侵入し、条約勅許を求めるといふ大事件が起こります。これも横浜に集結している外国艦隊が、いつ大坂湾に行くかといふのは非常に大事な問題になってくるのですが、その情報を手に入れる。この情報をくれたのが清水卯三郎という日本人です。

ただし、日本人だけに結びつきを設けるような生やさしい形では南部の情報収集はなかつたのです。有名なフランツ・フォン・シーボルトの長男アレキサンダー・シーボルトという人がいます。父のシーボルトが二度目に来たときにこの息子を連れてきました。お父さんは間もなく帰りますが（幕府に結局帰ってくれと言われて帰るのですが）、息子は日本に残ります。幕府が雇うわけにはいきませんので、結局、イギリス公使館の雇い人になります。このアレキサンダー・シーボルトは当時まだ非常に若く、この人と南部弥八郎は友達になっています。ですから、この若いシーボルトに会った時に話を聞く、あるいはイギリス艦隊がどういふ考えを持っているのか、どこに行こうとしているのかということですね。あと一人はヴァン・リードというアメリカ人です。この人はジョセフ・ヒコと一緒に「藻塩草」といふ日本で最初の新聞を作ったアメリカ人で、この人とも仲が良い。いろんな形で横浜情報を仕入れていきます。

その先にいきますと、これは一種のスパイ行為です。一つは、アメリカ公使館で火事が起こった。火付けか失火か、といふのは大事な問題で

す。浪士が横行していますから、火付けではないかと疑われていたのですが、それが火付けではなくて失火だと分かったのは、結局、こういうことなのです。アメリカ公使館に英語を習いについている若い日本人がいるのですね。これはもと箕作阮甫という、蘭学者でいえば元老クラス的人物の門人であった人ですが、プラクティカルに英語修業をやるうと思つてアメリカ公使館に入っていたのですが、その人からちゃんと聞いているのです。アメリカ公使館だけではなくて、どうもイギリス公使館にも両側面を持っている人を入れていたらしいのです。

アーネスト・サトウと先程お話ししましたアレキサンダー・シーボルトという人は、日本の外交文書の翻訳をしたり、あるいは外国の外交文書のドラフトを書いたりする役割の人達ですが、兩人が留守の間に彼らのドラフトを写したということで、半分だけのドラフトを南部弥八郎に報告している人がいるのです。察するに、先程のアメリカ公使館に入っていた人と同じように、英語を学ばせてくれと頼み込んでイギリス公使館で働いていた日本人だろうと思われまます。まあ、こうなると完全に非合法活動になりますね。

十 情報の穴場

次に南部の収集手腕上とりわけ注目すべき点について二点お話ししたいと思います。幕末になりますと外国の問題が全部絡んでくるのです。外国の問題と絡まない国内問題はないわけですから、幕府機構と同時に、神奈川奉行所内に情報の接点を持たないといけません。神奈川奉行

所の次官クラスは支配調役というレベルですが、奉行はこの下のクラスの言っている通り決済すれば何とか収まりがつくのですが、この調役が無能だったら奉行所自身が動かないということになります。

そういう大事な役に合原猪三郎という人がいます。これはペリーが来た時からずっと活動している優秀な人物（当初は浦賀）ですが、彼とあるいは森恭次郎という人々と南部は友達になっています。更に実際に具体的な内容を聞くには神奈川奉行所で通訳をしている人と連絡をとらなければならぬわけです。通訳も一人ではないのですね。北村元四郎とか立石得十郎とか西吉十郎、この人は維新後は司法省の高官になるような優秀な人ですけれど、こういう人々と接触を持って聞き糺したい情報を手に入れています。

西吉十郎のことだけ申しますと、英国艦隊が薩摩に来る前にカタをつけなければいけないのは、幕府から賠償金を取り立てることです。片方で、幕府は京都から奉勅攘夷で戦争をやれと言われています。その苦渋の板挟みになったのが老中の小笠原吉岐守なのです。ですから賠償金を渡すのか、あるいは戦争に踏み切るのかという非常に微妙な段階の文久三（一八六三）年四月二十七日、神奈川に来ていた西吉十郎という通訳をつかまえて、実際はどうかを聞いています。実際には幕府が賠償金を渡す、そういう交渉をやっているのだということ聞き出して、これを薩摩に報告しています。

ところで、私は史料編纂所で「幕末外国関係文書」という、外国と外国奉行所の往復書翰の史料集を編纂していますのでよく分かるのですが、外交の一番大事な機密は会話ではやらないのです。文書でやるのです。公使と外国奉行との往復書翰で繰り返し繰り返しやるわけですね。

イギリスだったら英語文とオランダ語文をあわせて渡すのです。それを翻訳し、日本側だとオランダ語に日本語を変換して向こうに渡す。これはもう毎日書翰のやりとりが非常に頻繁にやられています。この内容が分からなければ、本質的で決定的なことは分からないのです。従って通訳をつかまえるだけではだめなのです。まず第一につかまえないければならないのは、外国奉行所の翻訳なのです。

薩英戦争前後のことを申しますと、幕府が奉勅攘夷で戦争をやるという、形式的に出した通告文に対する返書がイギリス・アメリカ・オランダ等から来ます。どういう内容の返書が来ているのかという情報を木村宗三という外国奉行所翻訳方から密かにもらっています。で、この木村という人は、かなりダメージを受けたイギリス艦隊が、鹿児島から横浜に入港したその直後にイギリス艦隊に上つて情報を仕入れ、南部弥八郎に渡した当の本人でもあるのですね。今までいくつかの論文もあり、そこに木村の名前は出ています。そして黎明館から出している「鹿児島県史料」にも入っていますので御覧いただきたいと思えます。

ところで、もっと大事な人は皆さんだれでもご存知の福沢諭吉です。彼も外国奉行所翻訳方に勤めていた人物なのです。南部弥八郎は、木村以上に福沢から非常に大事なポイントになる情報をもたらしているので、三つの例を挙げますと、第一番目に二月十九日に戦争を辞せずというイギリス代理公使ニールが幕府に突きつけた文書があります。これから江戸・横浜は大騒動になるのですが、その翻訳を福沢がやっています。しかも幕府の返事を彼がオランダ語に翻訳しています。どういう内容でイギリスから来たか、どういう返事を幕府がしたかということ、返事は二日後の三月二十一日ですが、それを南部は福沢から聞いているので

す。

第二番目に、これも大事なことです。下関砲撃を長州藩がやっています。これに対して四ヶ国がどう対応するかという会議を開き、幕府に対して通告するのが六月十日のことです。これは国際法において、下関海峡は通行自由であるべきだ、我々は長州藩を一撃する用意がある、ただし日本政府がこのような長州藩の動きを防止するならば、我々は時間の猶予を与えよう、という列強の基本的な方針が伝えられる六月十日の手紙も、そのまま福沢は南部に連絡しています。

第三の、一番大事な手紙は、これは薩英戦争そのものの手紙です。英国艦隊は六月十九日に最後の手紙を幕府に渡します。内容はこの十九日から先三日の間に薩摩に行くという最後通告でしたが、これを翻訳するのが福沢で、二十日朝のことでした。南部がこの話を福沢から極秘に聞くのが二十一日のことです。しかも彼の張り巡らした情報網から、この書翰を受けて幕府の若年寄が横浜に急行するという情報も手に入れるのです。こういう情報を全部手に入れて彼自身が横浜に急行するのが二十二日の夕方でした。ただしイギリス艦隊はその朝四ツ半時に出帆した後でした。ですからすぐこの情報は、可能な限り早い手段をとって鹿児島に連絡したのはいうまでもありません。しかし残念なことに、軍艦が鹿児島に着くのが余程速かったのです。これだけあらゆるアンテナをめぐらしながら、手紙が届く速さというのは、正に近世の社会に完全に制約された中で、南部と鹿児島藩の江戸藩邸は動いていたということになります。

十一 情報を吟味すること

以上、総て内容の問題を除外し、入手の特質のみご紹介をしましたけれども、南部という人はかなり政治的判断が出来た人だと思えます。鹿児島藩にとって、自分達の組み立てるべき論理に有利になる部分の的確に判断して報告しているわけです。時間の関係で、それ程ご紹介出来ませんが、一つはイギリスのやり方はかなり国際的に見てもおかしいという話です。

彼は二つの例を取り上げて国元に報告しています。一つは江戸の御殿山、これは高杉晋作達が火をつけて燃やしてしまったので公使館が出来なかつたのですが、この御殿山に諸外国の公使館を造るといふ動きがあつて、文久二（一八六二）年の末には、ほぼ完成間近といふところまでなつていたのですが、高杉晋作達がそこに火をつけて燃やしてしまつて結局実現はしなかつたのです。しかし、アメリカ人の間では、イギリス人のこのやり方は非常におかしいと言われていました。なぜならば、御殿山というのは江戸市民にとって桜の名所でした。まだ現在も多少残っています。飛鳥山と御殿山というのは、江戸市民の行楽の場所だったので。今、飛鳥山はまだ王子の裏で桜の名所として有名ですけれども、品川付近では御殿山が名所でした。イギリスでしたらハイドパークと同じレベルの公園だったわけ。もしイギリス人に対してハイドパークを自分のところの公使館にしてくれと言つたら笑われるだけだろう、そういうことをイギリス人が日本に要求しているのだ、ということが一点。

二番目は、最も日本が不利を蒙っているのは治外法権の問題だということ。史料の文章で読みますと、

条約中、異邦人は其本国の法を行うべしとの一条、日本国威の立ち申さざる根元に付き、是非相改め候方急務、格別無理なる苛法にこれ無く候へば、承引せざる国は決してこれ無し、

あまりひどい法律ならともかく、そうではない国だったら治外法権は認めない、ということ。これを既に文久二年の段階で南部が入手し、鹿児島藩に送っているのです。ですから鹿児島藩がイギリスとの間で論理を組み立てるのに必要な武器としての情報を彼は送ったと私は思っています。

第三番目は、これは「玉里島津家史料」の中にも非常に良い史料が入っているのですが、先程指摘した琉球問題、南部が報告している言葉で言えば、「別して琉球は御用心有りたし」という問題についてです。何のことかといえますと、ロシアがシベリアを通過して巨大な鉄道を極東まで引こうとしている。このようなロシア勢力が東に来れば、それと対応してイギリスとフランスは、高麗（朝鮮）・琉球・対馬に来るだろう。この動きに注意しろ、というのです。これは日清戦争までの極東の国際関係そのものなのです。

四番目は、これは皆さんが意外に思われるかも知れませんが、南北戦争の状況に非常に注意しているのです。今で言えば「風と共に去りぬ」位でしか頭に浮かばないようなあの南北戦争を、なぜこれ程注意しているかといえますと、これは正に国際関係なのです。アメリカは南軍と戦争しているのですが、南軍に対してイギリスとフランスが援助しようとしているという国際的な構図、そしてイギリスに対抗するためにロシアはアメリカを支援している、この構図を頭に入れないと外交関係はうま

くないかない、という判断を南部は国元に送っているのです。

従って単に情報収集というと、機械的な話だと思われるかも知れませんが、情報というのは政治の一部ですから、それには嘘もあり、あるいは意図的なデマもあります。しかしそこから何を運び抜き、自分に必要なものとして取り入れるかとなると、正に収集する人の能力そのものが問われることになるわけです。

十二 西郷における情報と政治

時間に限りがありますので、少し端折りまして次の問題、すなわち京都の問題に移ります。情報をうまく集めている藩の中で、先程も少し名前を挙げましたが、細川藩も良い情報を集めています。ただし集めても熊本藩と京都藩邸は、いくら良い情報でも、政治方針を立てる場合にはほとんど使うことが出来なかつたのです。

しかしながら、鹿児島藩はそうではなかつたのです。今見てきた南部の情報というのは、当然国元の鹿児島藩に來ると同時に京都にも送られるのです。そして極秘の情報あるいは細かく説明しなければならぬ情報については、直接南部自身が、あるいは益満休之助のような人間が京都に行つて細かく報告する体制が出来ていました。そして元治元（一八六四）年の三月以降は、二度目の島流しから呼び戻された西郷隆盛が京都に居ることになります。そして国元の大久保と非常に緊密な連絡を取りながら新しい体制を作ろうとします。その最初が、先程お話ししました蝦夷地問題を鹿児島藩のイニシアチブを握るための争点に出來

ないかと模索をすることでした。

西郷隆盛は鹿児島の人だけでなく、中々人氣が衰えない。いろいろな人氣の理由というのはそれなりにあると思うのですが、私のようにこの時期の研究をしている人間から言わせてもらいますと、手紙が面白い。手紙といっても彼の字は右上がりの非常に癖のある字で、なかなか読みにくく、字が良いというわけではありません。手紙に内容があるということなのです。幕末でも多くの手紙には内容がないのです。内容のある手紙は珍しいのですが、西郷の手紙は元治元年三月、特に京都に上ってから明治元年の戊辰戦争の時までの手紙は非常に内容が豊かなのですね。そんなことで私は、彼に関心を持っています。

いろいろな所から情報やニュースを集め、しかも必要な時には的確な人物を派遣して、具体的な調査項目を示したうえで情報を収集させ、そしてそれにもとづいて判断をしているわけです。判断した結果は非常に断定的な言葉で、彼の手紙、特に大久保との往復書簡の中にあらわれてくるのです。人に相談したいとかいうことではありません。会津と一緒にするとか、あるいは長州を追い込むとか、幕府にくつつくとか、いわば鹿児島藩の基本路線が、彼の手紙の中で非常に明確に、断定的といつてもいい口調ではつきり述べられています。こういうのは彼の手紙だけで、さすがの大久保もそこまでの手紙はなかなか書いていません。御存知の通り、西郷は次第に鳥津久光と仲が悪くなります。もともと二人の仲は良かったとはいえませんが、仲が悪くなるのも無理はない、このような手紙を自分の部下が平然と書くというのは、お殿様にとって耐えられることではなかったのではないのでしょうか。

これも時間の関係でごく少量の材料だけ提供しますが、禁門の変の直

前、長州藩が京都に上つてきます。いわば京都の状況をひっくり返して、ひっくり返したうえで下関に向かってくる四カ国艦隊に対抗しようとする、乾坤一擲の軍事行動を起こします。では、長州がどう出てくるのか。彼が長州の探索にやったのは、後の桐野利秋の中村半次郎です。中村半次郎は長州に非常に気に入られている。考え方自身が攘夷派ですから怪しまれずに長州藩邸に出入り出来る。当時は仲の悪い薩長の間で、怪しまれずに長州藩邸に出入り出来る数少ない人間を長州の国内に送りこもう、これが六月十四日です。

置き申し候、
いづれ脱藩の姿にて長州に入り込み候手段に致したく候様、相達し

もう中村には行けと命令してしまった。本当の暴客だから向こうについてしまうかも分からない、しかしやった方がいいだろうということで、禁門の変の一ヶ月前に長州に行かせています。そして御存知のように禁門の変は、長州の無惨な敗北で終わりました。その中で一番のリーダーシップをとっていた久坂玄瑞という、まだ三十にもならない、高杉以上に優秀な、あの吉田松陰の妹を嫁にもらった人物は責任をとって鷹司藩邸で腹を切ります。こういう惨めな敗北をしました。そしてすぐさま長州藩は朝敵になります。

この時すぐに行動を起こすのは西郷ですが、やはりその前提としての確な情報を長州から集めます。指示を出すのは早くも八月一日のことで、非常に機敏な判断で二人の人物を長州にやります。まず見させるのは本藩萩の情況、第二に見させるのは特に本藩と仲のあまり良くなかった岩国吉川藩の動向です。これが本藩と対抗関係にあるかどうか、あつたらその間の離間を計り、いわば長州を弱める方針を立てる。そのために非

常にはつきりした調査項目を立て、二人の人物を長州に派遣しています。その翌月九月八日のことですが、大久保に対する手紙の中で外国探索について言っています。西郷は言います。いつ、下関に来た外国軍隊が大坂湾に来るのか、実際には翌年慶応元年九月に入って来るわけですが、もう、いつ来るかというのは時間の問題だと分かっていたので。しかし、いつ来るかというのは、京都にいただけでは状況が分からない。しかも江戸情報の的確なものをもたらしていた南部弥八郎はちょうどその前日に京都に上って西郷と相談している最中でした。従って京都から江戸に二人の人物を外国艦隊の動向を探らせるために下向させた、と。

あと一つの史料は、黒田清綱、これは画家で有名な黒田清輝の義理のお父さんで、歌人としても有名ですけども、西郷隆盛の非常に良い理解者であった人です。この人も慶応元年には京都に来て西郷とか、あるいは京都詰めの中とかと一緒に、第二次征長反対の動きをやるのです。西郷から言えば、一番信頼している、しかも自分より年上の人を大坂にやったんですね。大坂というのは將軍が軍隊を擁していつ長州に出発するか、大事なポイントの所なのです。ですから黒田に対しては目上の人に対してお願い事をする手紙を同年の十一月に書くのです。何を調べてくれと頼んでいるのかというと、一つは將軍上洛という噂がある、これが事実かどうか、第二番目に田沼玄蕃頭、これは天狗党追討の総責任者として、あの越前で残酷にも武田耕雲斎以下三百名の首を斬った張本人ですが、この人が軍艦を大坂湾に回す噂があると云っているのです。そこでいったい何のために回すのか、あるいは江戸の方では將軍を呼び戻したい勢力もまだあるのか、將軍を引き戻すために軍艦を寄越すのか、その動きを探ってくれというのを、非常に丁寧な手紙で頼んでいるので

す。その探索を黒田清綱がきちんと実行しているわけです。

十三 おわりに

時間があれば長崎の話もしたかったのですが、一応三時半になりますので、まとめの方に話を移しますが、今見てきたような全国的な情報網、これらは与えられて出来上がっているわけではないのです。多くの優秀な人々が、その場所その場所で努力しなければ築けないものです。そのような情報網を持ち、しかも、それを持つてくると同時に集約し統括する中心部分に、大久保とか西郷とかいった優秀な人物が、政治家として優秀な人間が多数いたことによって、鹿兒島藩は戊辰戦争に至るまでの政治の主導権を掌握出来たのではないかと私は考えています。そして日本の国威を落とさずに、幕府とは別の、彼らが理想とした国家をつくらうとして、戊辰戦争を一年の長きにわたって遂行したわけです。しかしながら、その間に慶応三年十二月の江戸の薩摩屋敷の焼き討ちのように、多くの薩摩人がそこで戦死したり腹を切ったりする等、様々な事件を含み込みながら出来あがった維新政権とは、いったい何だったかという事です。

西郷とか黒田清綱とか、そして大久保もそうですが、この時代にはこのように各藩で優秀な政治家がのびのび行動出来ました。私はそれを幕末的情况と呼んでいます。しかし、そのような幕末的情况は、新政府が確立することによって急速に消滅します。

これも事例をあげるときりがありませんが、一番分かりやすい事例を

あげますと、先程の南部弥八郎は一番良い情報を手に入れたものの、通信手段としては近世的なものを利用するほかなかったと言いましたが、明治に入って新政府が一番最初に革命的に変えたことは、何よりもこの通信手段でした。

電信の導入です。通信の導入には巨大な国家資本が要ります。それから国家レベルで電信の通信技術者を養成する学校を開かなければなりません。国家レベルでしか出来ないのです。どこの通信をまず確立しなければならなかったのか。それは長崎と東京間という正に日本国家の生命線の部分でした。なぜ長崎か。長崎には既に海底ケーブルによって、シベリアと上海から全世界の情報が瞬時に伝わる海底電線が来ていたのです。これを東京の、すなわち国家権力の中心地である東京につなげることによって、全世界の動向が瞬時に政府の中枢部に入る体制を出来るだけ早く作らなければならない。これが正に日本の情報大動脈線となるのです。

次に、どこにこの電信網を拡げるかというと、新政府が必死に進めていた徴兵制軍隊の置かれ始めていた全国の鎮台と軍艦が置かれている軍港です。後には電信は民衆の便宜のためになります。一番最初に便宜を図らなければならないと考えて必死にやったのは国家に対してでした。こうなりますと民間の緊急連絡は総て電信を通じてしか行えないことになります。外国との貿易も電信で行います。誰が、どういう内容で打ったかというのは、全部国家権力に掌握されることになります。日時・内容・人物ですね。

郵便制度も同じです。郵便というのは民衆の手紙交換を便利にしてやろうとして生まれたわけではないのです。国家と各県との往復、県と県

との往復、いわば行政の毛細血管を郵便制度で作ろうとしたのです。それに後から民間の手紙が乗り始めるわけです。従って後になりますと、国際的な問題になりますから、削除されますが、手紙の開封権が国家権力にあるというのは、当初の法令には堂々と明記されています。おかしい人間だと権力がいらんだ人の手紙は開けられる。それが前提でしか郵便制度は当初は使われませんでした。

情報の全国的な広がりや流通というのが、明治の初年代になりますと、国家によって一元的に組織され統制されていくことになります。私の言葉で言いますと、幕末段階が既に過ぎ去りつつあったということですが、ただし当時の人達にとって、過ぎたかどうかというのは頭では分かっても、実際には自分の経験でしか理解出来なかったのです。

最初の経験というのは何か。それは明治七年の佐賀の乱です。江藤新平の征韓派、あるいは鍋島には封建派といわれる守旧派が非常に強いですから、彼らが挙兵した際のイメージ、頭に思い浮かべていたのは長州諸隊の反乱なのです。自分たちが旗を揚げれば、やがては各地の士族が、あるいは征韓派が反乱に立ち上がるだろうという、このようなじわりじわりとした動きの中の拡大、それは幕末慶応元年から二年の正にその状況です。しかし現実には既にそうではなくなっている。大久保利通はこの情報を得るやいなや、自ら率先して九州に赴くのです。全国の軍艦は電信で総て九州に集結されます。軍隊は一拳に九州に軍艦によって運ばれます。ここまでは、あの犀利な江藤でも見通すことは出来なかったのです。自分達の思っていたテンポではないテンポで国が動き出してしまったのです。

次の経験は私は明治十年の西南戦争だと思えます。この時になると、

情報網がほぼ完備してきます。中央権力はどのような状況かといえますと、まだ土族軍隊は残っていますが、ほぼ徴兵制軍隊が整い、全国の鎮台兵が軍事動員される。その軍事動員も軍艦で九州に急行する。しかも軍艦が足りません。軍艦が足りない時には民間の商船を徴発することが出来る法律まで持っています。その膨大な民間の商船を持っていたのは三菱です。これが総て輸送船に転化する。では電信はどうかと言いますと、軍事電信が優先されますから、民間は使用禁止です。民間の電信は打とうとしても打てない。しかも政府の報道管制で、戦地から発表されるのは官制のもので、電信と手紙は権力が握っています。こういう状況で西南戦争というのは戦われたと私は思います。

歴史というものは一面非常に皮肉なもので、ある意味では悲劇的なものです。当初思っていたものとは全く別の巨大な組織を作り上げ、それが動きだしてしまつたときには手の打ちようがなくなるということ、これは、幕末的情况が急速に崩壊した明治初期もそうですし、今後もあるかも知れません。

自分の思っていたことが現実といかに乖離するか、それは悲劇ですが、それは歴史そのものでもあって、人間を理解する上の一番大事などころかも知れません。現実の動きとしては、日本ではこれ以降急速に中央集権体制が強化されます。地域の独自のエネルギー、先程お話ししました鹿児島県であれば、全国的世界的な視野を持たなければ藩の行動そのものがとれないといった、地域の独自のエネルギーが急速に吸い取られ、総てが中央に結集され尽くす日本の近代に入り始めたのです。

御静聴ありがとうございます。

*肝付兼武の経歴に関しては、谷沢尚一氏より多大の御教示を賜つた。ここに明記して感謝の意を表したい。

(付記)

この講演録は、平成八年度の鹿児島県歴史資料センター黎明館常設展示リニューアル事業を記念し、その本格着工に先立って、平成八年二月三日(土)に開催された「黎明館特別講演会」での講演をまとめたものである。

なお、講師の宮路正人氏は平成七年より鹿児島県史料編さん顧問に就任していただいている。